慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	次号目次
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1963
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.56, No.11 (1963. 11) ,p.1152(150)-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19631101-0150

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

（注3）アジア経済年報は毎年日本エカフェ協会によって翻訳出版（東洋経済新報社より）されている。またアジア経済四季報の主要な論文ないしその他のエカフェの出版物のうちの重要なものは、日本エカフェ協会から旬刊の「エカフェ通信」にのせられており、その参照が有用である。

（注4）UN, "Regional Trade Cooperation" and "The Scope for Regional Economic Cooperation in Asia and the Far East" Economic Bulletin for Asia and the Far East, June and Dec. 1961.

（注5）地域協力の理論的問題に関しては拙稿「低開発経済統合理論とその適用」世界経済評論、一九六三年四月号参照。

（なお本稿の作成に関しては、日本エカフェ協会、栗本弘調査部長に種々御教示をえた。記して感謝したい。）

次号目次

論説

ガリアにおけるコロヌス制度……宇尾野　久

経済統合（とくにEEC）の通貨・金融的側面と内外均衡……深海博明

武蔵国埼玉郡における地主経営——幕末期在方市場の諸問題——……佐々木陽一郎

資料

東南アジア諸国における資本形成の動向……川島楊子

書評

島崎晴哉著『ドイツ労働運動史——根源と連続性の研究——』……飯田鼎

新刊紹介

新刊紹介

小林　昇編『経済学史小辞典』

経済学の辞典といえば、千ページ以上もの大部のものを想いうかべる。およそ辞典というものは、書斎の隅において、ときどき必要なところをみるというのが普通であるが、たまには読む辞典もあってよいと思う。この経済学史小辞典こそ、まさにそのような要求に応ずるものであるということができる。

本書の特徴は、編者序文にものべられているように、経済学史上の主要人物とその主要著作について、小項目式にかなりくわしく収録している点である。とくに人物中心にして、その著作について内容を紹介しているという点では、今まで試みられなかったことであり、本書のもつ意義は大きい。経済学史上のあらゆる人物を網羅しており、マルクス派もケインズ派も、ひとしくのべられているのも大きな特徴がある。また福沢諸吉、河上肇、左右田喜一郎、福田徳三、野呂栄太郎をはじめ、多くの日本の経済学者についてくわしくふれている。この辞典をよんでみて気がつくことは、いわゆる有名な経済学者の陰に、いかに多くの無名の社会科学者が存在し、しかもすぐれた業績を残していたかという事実である。

さきにのべたように、この辞典は、あくまでも人物本位に、しかもその学説を追求しているものであり、その意味ではどちらかといえばひくためのものではなく、読むためのものであるところに大きな特色がある。そして附録として「諸学派概説」として、重商主義、重農主義、古典学派、アメリカ国民主義経済学、マルクス学派、制度学派、ローザンヌ学派—一般均衡理論の展開、オーストリア学派、ケンブリッジ学派にいたる経済学史の流れが簡潔に追求され、さらにくわしい経済学史略年表がつけられていることは非常に便利である。また索引も人名だけでなく、書名索引がついていることは、研究者にとって非常に有益であり、本辞典の編集者の良心的な態度に敬意を表わさずにはいられない。

しかし、何といってもスペースも小さく、そのために説明が簡単になりすぎたりする点はかくせないが、それにしてもこれだけの規模で、これだけの内容をもりこむことは決して容易なことではなく、編集者小林教授を中心とする執筆者の方々のなみなみならぬ努力のほどを読みながら感じた次第である。ただ、読者のひとりとして慾ばったことを云わせていただくならば、ひとりの人物について、どの著作が最も重要なものであるか必ずしも明らかではなかったし、また経済学史上の人物についての古典的な研究が、その人物および著作の紹介のあとにつけくわえて戴ければなおよかったと思う。たとえば、マルクスについていえばメーリング、スミスについてはレイの伝記というように。しかしこれもこのスペースでは無理な注文にちがいない。願わくは、この辞典を基礎として、より一層大規模なすぐれた経済学史および思想史の辞典が、将来現われることを期待するものである。学生諸君の座右に本書を推奨するものである。（学生社・一九六三年六月刊・ポケット判・三二〇頁・四八〇円）

—飯田　鼎—